

『青森県史 資料編 中世4
金石文・編さん物・海外資料・補遺』

千々和 到

1

みごとに大冊。

美しい写真。

きれいな実測図。

そして、ずつしりと重たい本。

これが、昨年出版された『青森県史 資料編 中世4』、つまり「金石文・編さん物・海外資料・補遺」を収めたこの本を拝見したときの、最初の印象だった。その印象は、全ページを拝見した後の今も、変わらない。この大部の書物をお作りになったことに対して、執筆された方々、関係された方々に、まずは心からの賛辞を述べさせていただきたいと思う。

さて、この本は、青森県史の中世の部の最終巻となるので、本来の対象となる資料以外で、他の巻に収められなかった資料も、第4部に「補遺」として掲載している。それを含めた章立ては、次のようである。

第1部 金石文編

第一章 総説

第二章 研究史編

第三章 資料編

第2部 編さん物編

第一章 南部氏関係編さん物

第二章 津軽氏関係編さん物

第三章 松前氏関係編さん物

第四章 解題

第3部 海外資料編

第一章 中国・朝鮮資料

第二章 宣教師資料

第三章 解題

第4部 補遺

第一章 外浜・ひのもと関係資料

第二章 南部氏関係資料補遺

第三章 安藤氏関係資料補遺

第四章 津軽・浪岡北畠氏関係資料補遺

第五章 松前氏関係資料補遺

また、本書の掲載写真は巻頭にはカラー写真が三〇頁もある。そしてA4版で約八五〇ページもある大きく厚い本なのに、価格は五六〇〇円という。

2

私が本書の書評を依頼された理由は、中世の石塔である板碑の研究を

しているようだから、ということなのだろう。したがって、まず板碑などの中世の石造物について批評をさせていただきたいと思う。

まず、本書の主要な仕事である拓本について。墨色がうすく、美しい。とても品のよい拓本だ。しかも、刻まれた銘文も、とても鮮明で、明瞭に読めそうならばらしい拓本である。採拓技術が優れていることがよくわかる。念のため調査作業をされた方々のお名前を見れば、採拓は仙台の佐藤正人氏がひとりでされたということだから、それはもう、当然といえば当然であろう。すばらしいと思う。一体、このように美しい拓本を採るのに、どれほどの時間がかかり、どれほどの労力を要されたことか。

頭がさがるし、この本があれば、私のように青森から遠いところに住む人間でも、いながらにして、また青森の板碑の研究のやり直しをさせてもらうことも、出来るかもしれないとさえ思う。私も二度ほど見学に行った弘前市中別所のすばらしい板碑群も、検討のし直しができるかもしれない。

だが、必ずしも歴史の研究者ではない方々のための配慮として、いくつか期待したい、注意したいと思うことを述べさせていたきたい。

ひとつは、ときどき挿入されている「用語索引」についてである。これは、とても便利な配慮だと思う。一人でも多くの読者に読んでもらいたい、理解してもらいたいという意欲の表れだといえよう。本書を見ながら、いちいち辞書を引かないでもよいようにという心遣いでもあろう。ただ、この「用語索引」は、名前があまりふさわしくなくと思う。むしろ「用語解説」と言った方がよかつたのではなからうか。そして私の考える用語とは、しばしば読み方が違っていることがある。たとえば二七

六頁の「用語索引」では、「反花座」は「はんかざ」とされ、「大蔵派」は「だいぞうは」とある。私は、これまで「かえりばなぎ」と読んできたし、「おおくらは」と読んできた。通例と異なる読みに、何か根拠があるのだろうか。

また、一五頁の「用語索引」には、「支提」や「卒塔婆」が出ている。これは、説明が間違いとは言えないが、その前にサンスクリットのストゥーバが「卒塔婆」に、チャイティアが「支提」にと、梵語が漢訳されたのだ、と説明してもよかつたのではないか。また、「孝子」は、「教子」と書かれることもあるから、読みを「こうし、きょうし」と二つ並べてもよかつたかもしれない。いかがか。

3

もうひとつは、本書は、基本はもちろん資料集、史料集の位置づけなのだろう。だから、出版していただいたこの史料集を用いて、他の研究者が自分の研究をする、ということが当然にあるはずだし、それこそが期待されることなのだろう。そうだとすると、ひとつは、解説が、やや、踏みこみすぎてはいしないだろうか、と思うところがある。必ずしも板碑研究者の間で通説となっていないことがここに示されること、そして、特に、そう判断した根拠になる先行研究が、きちんと示されないで結論だけが書かれることは、必ずしも良いこととは思えない。

「どうして佐藤さんは、そう考えたの？」

そうかもしれないけれど、それって、根拠はなんなの？」

そのように聞きたいところがいくつもあるのだ。多分、佐藤氏の判断は正しいだろう。だからこそ、「根拠」となる文献を読んでみたい。でも探してみようにも、紹介されていない。直接教えていただくには時間がかかるし。そんなとき、註で、根拠になる先行研究が書かれていれば、ありがたかったと思うのだ。

たとえば、関東地方の板碑は十六世紀の末に終焉をむかえる。それは常識だ。この事実が二四三頁の記述の根拠となっているのだから、「中世社会が崩壊する十六世紀末になると突然板碑は造立されなくなる」(傍線は千々和)と書かれている。しかし、私は、「突然」消えるということではないと思っている。事実からすれば、関東の中でも、地域によって、十五世紀の末に消えるところ、十六世紀に徐々に消えるところ、さまざまだ。一番多いパターンは、十五世紀末ころから徐々に板碑が減っていつて消える(これを拙著(註1)では、「ローソクの炎が消えていくように」と書いた)ということになるのだが、板碑の終焉は、まだまだ謎が多いのだ。

4

海峡を越えた北海道の戸井の板碑が美しいカラー写真で紹介されたことも、とてもうれしい。戸井町は函館市に合併されたのか、と感無量だ。私はこの板碑に、二度お目にかかっている。一度目は家内と一緒に、函館のシンポジウムを抜け出して、レンタカーで戸井町に行き、拓本を探らせていただいた。この時、それまでの報告のように縦に二つの梵字が

書かれているのではなく、縦にキリク、サ、サクの三尊の梵字が書かれていることを確認できた。これによって、この石が、やはり板碑であることが確定できた。でも、私の拓本では、銘文はほとんど読めなかった。その数年後、今度は野口達郎氏にお願いして、調査に同行してもらった。彼は、拓本がとても上手だ。それで、今度はぜひぶん銘文を読める拓本になった。その調査結果は、一九九〇年に刊行された羽下徳彦先生編の『北日本中世史の研究』に、「北海道の板碑をめぐって」と題して公表した。この読解によって、この二つの板碑は、学界に「板碑」として初めて認知されたと思っている。

今回の『青森県史』では、この二基の板碑がカラー写真のほか、拓本も掲載されている。ほとんどは私の読解を継承してくれているが、さらにこのうちの一つの板碑の紀年銘にも挑戦してくれている。そして年号は「康永」であろうという。年号の読みは、私にはなんとも言い難いが、十四世紀後半のものだろうという私の推定は、ほぼ近いといえようか。

だが、この二基の板碑についてもっとも重要なのは、これらには二条線があり、青森の板碑にはそれが無い、ということなのである。詳しくは前掲論文に譲るが、このことは、戸井の板碑が、青森よりもっと遠い日本海側の地域と、むしろ近い可能性を示唆しているといえるのである。青森県史の関係者の方々に、是非、ご教示をいただきたく思う。

5

板碑のほか、石塔や牛玉宝印の版本について、あるいはウラジオスト

クの水寧寺碑など、本書は、大変に興味深い資料をたくさん掲載してくれている。特に、この水寧寺碑に刻まれた字のひとつの字体は、詳しいことは知らないが、日本に伝わったものとは少しく異なっている梵字のように見える。インドから中国に伝わった梵字は、そのうちのシツダマトリカ体だけが日本に伝わったのだという。そのこととかかわる字なのだろうか。

内容が豊富で、本当に興味のない本だと思う。このように貴重な本をいただき、書評の機会までいただいて、本当にありがとうございます。しました。

註

(1) 千々和 到『板碑とその時代』平凡社、一九八八。一九八四年に、青森県立郷土館の鳴海秀氏と福井敏隆両氏が編纂した『青森県の板碑』の刊行記念展覧会があり、その折に記念講演をさせていただいた。その翌日、鳴海氏の車で、日本海側を調査させていただき、とても勉強になった。そのときの知見が、この拙著の元にもなっている。

(A4版、八五四頁、二〇一六年六月刊、青森県、本体価格五六〇〇円

+税)

(ちぢわ・いたる 国学院大学・史学科 教授)